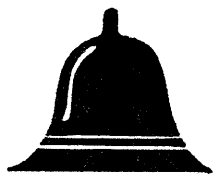


## 私の子供時代



内田光子

私、びっくりすることだらけです。日本では。私の同年代の人にあってもね、なんでこんなに、平均に近づこうとする人たちはかなりだろうと。試験を受ける、受験をするということ自体も、平均よりちょっとよくなるうっていうためでしょう。でも、仕事しても落ち着こうとする。会社に入ったら出る釘は打たれるから、出ないようにしてね、いかにしてうまくやっていくかということだけ。そんなこと何のためにするのかと思う。結局は、全てがステップなわけでしょう。男の子は、幼稚園に入っ

て、なおかつ幼稚園に入る前から受験勉強するのは、つまり就職先

先にいかにして出ない釘になって落ち着くか、のためでしょう。だから、実に不思議なことだと思ってるね。

お茶の水の幼稚園の生活、私は全くしあわせだったと思っています。幼稚園、小学校で受験勉強をさせるなんて、全く、ヒドイ話で、こんなことは、神経衰弱をつくっているようなものです。

私は、十二の時にヨーロッパに行っていなかったら、ピアノにはなっていなかったと思います。というのは、日本では、音楽学校とかいろいろありますけどね、どっちをとるかといわれた

ら、私は、大学へ行っていたと思います。だから、ヨーロッパに行ったということによって、音楽家の道へ進んだのかもしれないと思っています。あの状態で音楽を勉強していて、私、桐朋系でしたからね。

あれは、子どものときに行ったのがよかった、と思います。幼稚園のときの村田先生のおかげさまでね、チビのときから、目白の子どものための音楽教室へ行っていたのね。

けれども、自分で疑問を感じて、何をとるかということになったら——もちろん、判断力を持っていなかったかもしれない——もし、判断力を持っていたらばね、音楽家にならなかったかもしれないのね。そこまでのいい切るの、問題ですけど……。

ピアノを弾く……音楽を創る、ということとは簡単じゃないと思う、漠然とダラダラ弾いていることではないですね。……そのまま、社会にはまって暮らしていったらうと思います。

小さいときは、一日三十分ピアノを弾いていました。小学校へ行くようになって、だんだんゴニョゴニョいわれてね、あのう、親同士の会話からいろいろと話があるんですよ、なんとかちゃんは一時間半やっていると、二時間やっていると、とかね、意外と覚えていたんですよ。そんなことわかれても、こっちはピンとこないしね。幼稚園のときは、自分で三十分、と決めていたんですね。

桐朋のもっと上の方に通うようになってから先生についてですが、先生のところへはじめて行ったときに、三十分しかやってないって話をしたら、マァーとあきらかえられて、一時間は最低やってもらわなければ困ります、っていわれたんです。だからまあこっちは、さばよんで四十五分とか、そんな具合に増やしていったんですけれど(笑)。まあ、ピアノなんて、そんな、誰でも弾くことはできるんですね。

### 私のおくった子供時代

幼稚園時代は、私はわりに弱虫だったの、今でも私は、最終的にはそうだと思うけど。兄弟がいたんだけど、どちらかというと、チビのときにわりに一人でおかれたことが多いんですね。三歳のとき、熱海から出てくる……兄が小学校で、私が幼稚園で、姉が中学へ編入試験を受けるというときで、まあ、チビなんでどこの幼稚園行っただけかまわない、という……それよりも、兄貴の小学校の心配の方が多かったようです。

普段、私は、本を読むのが好きでした。読み書きは好きです。ですから、本を山のようにボンと私の目の前に置いて、私をボンと家に置いて、母はいろいろかけずりまわっていたと思います。

す。私は家で一人で本を読んでたつてことを、はつきり自分で覚えていゝるんですね。

幼稚園に行つても、どつちかというあまりギャアギャア仲間になつて遊ぶというよりも、一人ボソンとしてゐることがわりに多かったと思います。でも、いっしょに遊んでましたけれどね、完全に仲間はずれになるつていうのではなくてね。お絵かきなんて、覚えてるわ、とても楽しかったの。二人ぐらい、とても仲良しがいてね、そのうちの一人がとてもおませさんだったの、そう、けい子ちゃん……色には興味があつてね、「その肉色のクレヨンちょうだい」なんて、へえ、肉色なんてはじめて聞いたと思つたのね、肌色つていうのは知っていましたけれど……そんな記憶があるのね、だから、お絵かきが楽しかった——つていうの覚えてるのね。いろんなえのぐがあつて、みんなで好きな色でいろんなのかいてね。

ピアノを人前で弾くのは、とてもきらいでした。ほんとにきらいでしたね。もう、それは、嫌悪以上にきらいでした。普通に、きらいで、やだ、なんていう以上にいやでした。だから、幼稚園時代から、ちょっと弾いてつていわれるのがなによりいやでしたね、それはもう、小学校時代もずっと……。だからね、十五、六になつて、親と離れてウィーンに留学生として残っちゃつて、一

番うれしかったのは、ちょっと弾いてつていわれることが絶対なくなつたことですね。

舞台上「弾く」と思つて用意すればいい、家にお客さんが来たらちよつと弾いて、つていわれるのがなによりいやでした。だから、自分が人前で弾くのがいやなんじゃないか、という、決まつてしまえば、いいわけね。おさらい会があるから弾かなくてはいけない、ウィーンにいても先生の発表会なんかに出されるのね、それはいいわけ。何百人いようと、それは関係ないんですね。

今は、そんなでもない、今はね、だつて、これで食べてゐるからしょうがないのね(笑)。それに、今になると、そういうことをいう人がいなくなつたからね、だからいいの。

小学校へ入つてね、二年生になるまで、担任の先生は、私がピアノをやつてゐること、知らなかつたと思います。でも、みんなでオルガンやる、なんていうときになると、目立つちゃうからわかつてしまいましたけれど。

ですから、自然な状態では、私は絵をかいてゐる方が楽しかつたのね。それから、お砂場とか、すべり台が好きでしたね、それから、鉄棒が好きだつた……そして、ボール投げは好きじゃなかつたのね。一人で何かやるのが好きだつたんですね。小学校へ入

ってからも、一人で鉄棒ばかりやっていたの。

今は、分別がありますからね、いやだ、なんていいませんけれど、小さいときは、死にたいほどいやだったのね。だから私は、子どもが人前でやらせられるのがいやなのが、よくわかるのね。やりたがる子は別ですけど……。やりたい子と、やりたがらない子に分れるはずなのね。やりたがらなかつたら、絶対やらしちゃいけない、と思うのです。——それ、おもしろいのね、ほんとうに、演奏会で舞台に出る、というのと全くちがうんですね。

あつそれからね、幼稚園で面白いもの遊びなんてした印象があつて、そんなのが楽しかつたとかね。とても今の、他の幼稚園の受験勉強のようなものとは、全くちがいましたね。あれが、いろんな意味で、私はヨーロッパの幼稚園なんかよりいいんじゃないか、と思うんです。もちろん、それは場所によるでしょうけれど。ドイツ系の幼稚園なんていうのは、ただただ子どもを預る、という感じでね。いろんなことやれて、集団生活にある程度経験できて——やはり、家の中ではどうしても甘えがでる——そういう意味で、私のおくった幼稚園生活はよかつたと思いますねえ、今考えても。

## 私の歩んだ道

十六までは、ウィーンで両親といっしょでした。それから、父がドイツに行つてしまいました。その時十六でしたから、もし、ドイツに行つてしまつたら、そこで高校を卒業して……、そうしたら、完全に音楽家にはならなかつたと思います。それは、その段階で、すでにどつちかに決めなくてはならなかつたからです。

十八、九歳で、高校を卒業して、また試験を受けて、なんていうことをしていたら、プロとしてはやっていけないと……それだけきびしいもので、この段階で決めなければなりませんでしたけれど、自分で食べていく、というところまでは考えていなかったですね。家族が全くそんなことを考えていませんでした。女なんていうのは、うちの母をみてもわかるように、女はどうせ家庭に入るもんだというふうに思っていましたし、女が自分で生活するなんて全くいけないというのではなく、そんなことがあるってことすら、考えても出てこないですね。

演奏活動をするといっても、プロっていうより、半分アマミタいな、そんなイメージしかないわけです。だけれども、そうなら

そうなりに、なにか高校まで卒業してそうしていると悪い遊びになる、というように思いましたので、十六からは、音楽大学に行きました。

音楽大学といっても、外国の場合はちがいますから……音大は十二からですので、普通の中学と両方行きました。演奏部門というので、最低年齢十二歳、この他に教師課程と、演奏家のための演奏部門とあったのですね。ピアノ科もヴァイオリン科も、こちらの方は十二歳からでした。音大の課程は当時八年ですが、大人になつて入れば一年です。八年というのは、ほんとうに子どもの時から入った人です。十五で入っても、二十三歳なわけですからね。または、十八で入って八年なんているのは、全く形ばかりのものです。副科をとつていれば、一年でも卒業できるので。副科というのは、音楽史とか、楽理論とか、和声学などですね。

学校の生徒は、一人で学生寮に入っていました。下宿というより寮に入ったことは、とてもよかったと思います。十八歳から大学生用の寮でしたけど、ちょっとさばよんでインチキして……。寮生活は、全く自由……門限だけありましたけど。カトリック系の寮でしたから、外泊も許されていました。どこへ泊まる、ということがちゃんといってあればいくらでも。

門限は、私が行ってからも、だんだん遅くなりました。十一

時、それから十二時になったと思います。それより遅れる場合には、門番さんに届けておいて……罰金があったかしら、そう、時間ごとになにかあるんですよ。門番さんを待たせるわけですから。音楽会の後は、十一時の門限には、大体間に合うようになっていました。遅れる時は、それを前からいっておかないといけな

いのです。  
あとは、何一つ、束縛なしでした。ただ、寮だから、壁は薄いしね、隣の声が聞こえて、食事は悪いしね。でも、ちゃんと自分でつくれる設備はありました。

もうその時は、演奏活動をしておりましたし、最終的には、先生がその演奏についてコントロールして下さいましたし、そんなに回数なんかやるもんじゃない、という……。親の方は、演奏会なんかしなくていい、という考えでしたし。

それやこれやで……、もちろん、使おうと思えばね、いわゆる、なんていうのかなあ——子どもでうまく弾けるというのでねえ……。使われなかったのが、たすかった。それは、うちの親と先生のおかげだと思います。私にはまだ判断力がなくて、決められませんでしたからね。

## 自分の興味から出発

日本は、すばらしい芽を持ったお子さんが少ないように思います。平均的にはいいんですね。向うの場合は、平均のところへいくまでの人すら少ない、ただやっている、すつとんきょうにうまいのがポンポンといるんです。

日本の場合、これだけ平均的に弾けているのに、どうしてそれ以上が少ないんだらうと、不思議なんです。向うは、そこまですべて持っている人の数は、非常に少ないんですけど、そこまですぐに弾けたらもっと伸びる人がいるわけです。

だから、ピアノやっている人の数からいったら、日本は異常に多い、その代わり、演奏会へ行く人の数は異常に少ないんですね。そして、音楽学生っていうのは、音楽に興味がない。ピアノ弾く人は、音楽学生じゃなくて、ピアノ学生なんです。ピアノばかりガチガチ弾いている、そしてオーケストラの曲なんか聴いたことがない、そんなことでいったい何ができるようになるか、です。

子どもにバイエルなんかやらせて……私、よかったのは、子どもの時に家にレコードがあったことです。だから、音楽を聴いて

いました。聴いたことがなくて、バイエルやらされたら、いやになってやめていたと思う。あんなつまらない意味のないもの、なんのためにやるのか……ゲッソリするに決まってるもの、子どもは。

それはね、目隠しをしながら、子どもをずっと何も見せないで、灰色の部屋に閉じ込めておいて、えのぐだけ出して、ハイ、絵を描きなさい。絵のテクニクはこうです。そして、この色はこう使え、と教えこむわけね。そうしたら、子どもは絵をかけたこないわけね。自然の木を見たことない人に、木というのはこういうもんです、というのに近いことなですね。音楽を聴いていないで、まあまあ、あきすによく弾けるものだと思うぐらいね。

これは、おもしろい、不思議な現象ですね。ヨーロッパにいると、さすがにそういう現象はないですね。音楽を聴くチャンスは多いし、その代わり、技術的に、実際にピアノをやるっていうのは、日本で教えこむある程度のテクニクまでやる、っていうのは少ないんです。ほんとうに興味があればやりませんから。日本は、おもしろいことに、ほんとうに全然興味がないのに弾いている人が、けっこうたくさんいます。

私が受けた、お茶の水の教育——幼稚園、小学校ともに、たいへんよかった、と思っています。ヨーロッパでも、あそこまです

いものは少ないと思っています。それは、いい切れると思います。ただ、私は、ある一つの特種な学校の例だけでしよう、それで国全体のことはいえないと思います。ただ、ヨーロッパの場合は、年齢が小さければ小さいほど、つめこみませんから。

### 様々な興味、様々な道

でも、特種学校になると、今度は異常につめこみます。ある種のものだけは、異常に程度が高いんですね。日本はわりに平均的です。国によって、その程度はちがいます。イギリスあたりは、政府が変わって、学校制度も少し変わってきていて、悪いといわれている面と、よいといわれている面があるんですがね。

私は、いろいろな種類の学校をおくことには賛成ですね。人それぞれ、向き不向きがあるでしょう。もう全く数学の数字を見たくもない、わからない子はね、ちがう才能があると思うんです。そうしたら、みんな平均的にできなきゃならない、というのはウソだと思いませんか。もちろん、程度問題ですけど。1+1=2ぐらいは知らなければ困りますけれど、もっと上になってから、1+1=2だろうか、と考えこむようになれば、その辺は、その人の勝手としてね。

でも、平均的にできる、ということは、私は必要じゃないと思うのね。だから、音楽にしか興味がない場合は、中学からそっちの学校へ行っていると思うのです。ドイツ系の学校は、そういうように分かれていますね。ギリシャ語、ラテン語が入っているのは、特別の場合、クラシックといわれているところの勉強を主体とした学校です。それはかなりハイレベルの学校です。

オーストリアの場合は、ラテン語をするかしらないかは、中学の一年の時に分かれます。大学へ行きたいという人は、ラテン語をとります。だから、ラテン語というものを中心にどっちへ進むか、ということになります。あとでもとめることはできます。

大学へ行こうという考えを持つ人は、ヨーロッパでは非常に少ないんですね。大学へ法科へ行つて弁護士になって自立する、という人でなければ、そんなばかなことはしませんよ。大学に行ったこと、それを利用して、自分がそれを生活に使う。日本だったら、特に女の子で大学に行く人は、大体みんな、あの方、お見合のときにね……、八〇パーセントぐらいそうでしょう。もちろん、向うでもけつこういるわけですね。お見合の慣習がありませんから、自分で結婚相手を見つけるために大学へ行っているんじゃないか、と思うような人もいますけどね。それでも、勉強して法律事務所へ勤める、なんていってはいましたからね。

ヨーロッパの場合、子どもを養うっていうんじゃないんですね。女であっても、大学まで出してもらったら、もう自分でかそぎなさい、大体十八歳までを限度に、大学はもう自分で奨学金をとって進みなさい、という場合が多いんですよ。日本は、ことに女の子の場合は、嫁にいくまでは家にいる、そんなのが多いでしょう。その辺の観念が随分ちがう。

だから、ヨーロッパでは、大学へ奨学金で行っている人が一番多いんじゃないでしょうか。大学生が少ないんですね。日本では、親が投資したものは、あとで義理で返す、というようなねえ。

そんなことで、日本の、小さい子どもに対してとっていることは、全く気持ちがよいさたではないか、と思います。こんなことして、ほんとうに神経衰弱かバカをつくっているようなもの、こんな小さい時に教えこんで、記憶力以外何も使えなくなるんじゃないかしら。自発的に何かすることが全然できない、自発心ゼロの人間ができてしまうのではないのでしょうか。子どものときに、自分なりに考えて、やりたいことは何かをつかむ、それを十分にしておくことね。

## ハンディを越える

日本語というのは特殊なことばでしょう。他に関連性のないことばだから、そのハンディキャップは、たいへん大きいんですね。ヨーロッパは、横につながりがありますね。

私が外国へ連れられていった時は、変化が激しくて、つらい思いをしましたからね。だから、子どもってというのは順応性がある、というのは嘘八百ですね。それは、自分の体験からいえるんです。小さければ小さいほどことばが早い、なんていうのもウソ。子どもはわからないから、その代わり、抵抗がない場合には早い、それはつけ加えなければなりませんけれど。子どもは、抵抗さえなければ早い、ということなんです。

幼稚園から向うへ行つて、ひとつもしゃべらないお子さんを知っていますけれど、それは抵抗があるからですね。日本語はペラペラで、三つの時から向うの幼稚園へ行っていて、一言もしゃべらない、その辺が問題ですね。

だって、日本は、外国との動きが多いようで少ないでしょう。でも、ほんとにチビのときから、毎日 生活の中で、たとえば両親が国際結婚していると、子どものときから二つのことばを聞



いて育っている場合には、そのハンディはないですけれどね。家に外人の出入りが多いとかね。

私は、たいへん抵抗ありました。つらいことはありましたね。ことはなんて、私も長いことしゃべれなかったんです。わかっていてもしゃべれないですね。しゃべり出しても、それからドイツ語を読む、ということにすごく抵抗を感じました。学校そのものは、すごく程度は低かったですけれど、その上ピアノがありましたから。

子どもは、ある程度の変化には弱いですからね。大人の方は、自分でこうしたいと思って動けばいいのだけれど、子どもは親が行くから、あんたもいっしょに来るんだと、自分が行きたくないのにそんな所へ連れていかれちゃって……。あんなに幸せに学校へ行っていたのに、ちがう国へ行って、ちがうことばで、氣候はちがう、風土はちがう、でしょう。頭は神経質になっているのに入っちゃったし、たいへんなことでしたね。それで、たまたまない思いもしました。

このことを乗り越えたというのはね、克服したというよりも、生命力だと思っています。私はわりあい生命力はある、と思いますから、今、私がちがう国に行ったとしても、三カ月後には、もうその国の新聞が読めるだろう、と思うのですね。ロシア語を全然知

らなくてもね。そういう自信はあります。

ことばっていうのは、ある種の慣れですからね。簡単なんです。わかってしまうと。ただ、いいアクセントとなるとね。私が電話で英語をしゃべっていると、オーストリアかハンガリーの人とまちがえられます。ですから、ドイツ系のアクセントなんです。この頃、隠すのがうまくなっているから、ハンガリー系のユダヤ人っていうのが、一番適切な表現でした。

私は、子どものときの方がつらかったですね。たとえば、家庭にいた子が幼稚園に行くでしょう。でも、少しでも知っている所はね、いいんですよ。全く知らない所へ、ボンと行くのはねえ、非常に大変なんです。大人が考える以上に大変で、努力をしているんですよ。

だから、子どもを持つって大変だと思ふのよ。子どもが、何もわからないことにとりくんでいくのが、いかに大変かということね、その記憶がとて強く残っていますね。でもこれは、人それぞれがいのあることだと思えますけれど。そして、他の子と自分がちがうんだ、ということをはっきりわかる、というわけにはいかないでしょう。

小さい幼稚園の頃って、子どもよりも親の方が大変なんじゃないかしら。ある意味で、たいへん幸せなのは、親がよかった、と

いうことです。これは、子どものときはわからない、大人になってみなくてはわからないのね。見ていると、わりに音楽家ってアンバランスな方もいるのですよ。大体、家庭のことが原因なのね。これを「しろ！」っていわれたことがないのね。ただ、本が好きだといったら、本が山のように家にあってね。しょっちゅう本に親しんでいました。私は、人間の思考力はやはりことはで最終的に育つんだと思うので、広範囲にものを読んでいるということが大切だと思います。やりたいこととしてたら全部覚えるけれど、やらされたのでは……。

### 自己主義の主張

結婚したから家庭に入る、ということは考えない。私は、かっこうをつけると、完璧な自己主義なのです。私は自分で、絶対音楽家として生きたい、という考えがあるんですね。どんなことがあっても。だから、結婚しない、とはいいい切れないし、結婚したからといって……私と結婚するような男性がいるとしたらね、向うも身から出たサビなんです。

でも、子どもだけは考えます。なぜなら、子どもは知っててこんな母親と会うわけじゃないし、自分で選んだんじゃないからで

す。旦那の方は、知った上で結婚しようとしたんですから。子どもをつくったら、それは考えるでしょうね。もしも子どもをつくったら、数年間エネルギーをうんと制限するでしょうね。制限するっていうことはできるんです。そういうことを考えるでしょうね。

だからといって、全部を子どものためにつきこむことはしないでしょうね。私のエネルギーを全部つきこんだら、こんな不幸なことではないと思う。それじゃとても、私のように我の強い母親を持つたら大変なんですよ。

私は、自分のやりたいことをビシッと持っていてね、私は自己主義である、ということ認めないと、人間まがいをおこすのよ。あなたのためにやっているという……。自分を捨てる、という行為を見せている自分も、ほんとうはそうありたいんだと、そこまでいわなくてはね。犠牲になっていて喜びを感じているんだ、というところまで……。

(ピアニスト)